A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

14

ケラー

白百合を紅い薔薇に　道家忠道訳

シュティフター

石さまざま　手塚富雄　藤村宏訳

中央公論社

世界の文学　14　　©1965

ケラー
シュティフター

訳者　道家忠道
手塚富雄
藤村　宏

昭和40年3月1日初版印刷
昭和40年3月12日初版発行　　価430円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

ケラー　白百合を紅い薔薇に　3
シュティフター　石さまざま　245
解説　496
年譜　517

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

白百合を紅(あか)い薔薇(ばら)に

——原題　寓詩——

第一章　自然科学者がある処方を発見し、その実験のために馬上の旅に出る

二十五年ほどむかし、ダーウィンの自然淘汰の法則はまだ発見されていなかったが、今しも自然科学が一頂点に達していたころ、ある日ラインハルト君は鎧戸をあけて、山のうしろから出た朝の光を書斎に入れた。金色の光とともにすがすがしい夏の朝風が吹きこんで、重いカーテンとふさふさした彼の髪を強く動かした。

さわやかな日の光が照らしだしたのは、さながらファウスト博士[1]の書斎である。しかしそれはすっかり近代的な、快適な、こぎれいな感じに翻訳されている。時代のついた趣のある煙突や、化物のようなフラスコや釜のかわりにあるのは、きゃしゃなアルコールランプや軽い試験管、陶器の皿やすりガラスの栓をした瓶。その瓶にはありとあらゆる粉末や液体、酸だの塩だの結晶だのがつまっている。方々の机は、地質図や鉱物標本や木製の長石模型などでいっぱいだ。椅子や寝椅子にも各国語の学術年報がずっしりと積んであり、鏡台には真鍮の物理機械がぴかぴかしている。すすけた円天井にぶらさがる剝製の怪物のかわりに、生きた蛙がガラス器の中に神妙にうずくまって最後の刻を待っている。薄暗い隅につっ立つおきまりの骸骨もなくて、そのかわりに、人間や獣の頭蓋骨が真っ白に、こぎれいにならんでいて、それは年老いた錬金術師のぶきみな手品道具というよりも、好事家の飾り棚の玩具といった方がよさそうだ。埃だらけの植物標本のかわりには上等の紙に描いた植物組織の図が二、三枚、豚皮の大型判のかわりには、麻布装のイギリス風の豪華版が並んでいる。

どの本、どの冊子をあけてみても、学術書向きのラテン活字や数字の行列、対数などばかりだ。一冊といえど、人間的、または人倫的問題――百年前だったら〈心情と美的趣味の問題〉というところだが――を扱ったものはない。

さてラインハルトは、もう何週間もつづけていた静かなめんどうな実験に、またとりかかろうとした。部屋のまん中には工夫を凝らした装置があり、そこで一筋の太陽光線をとらえ、ある結晶体を通過させる。そして結晶の中での光線のはたらきを示し、できるなら、このよう

(1) 十六世紀はじめのドイツの学者、魔術師。悪魔に魂を売ったといわれる。民話の主人公。ゲーテの作が有名。

な透明な物質構造の奥深い神秘を照らしだそうとするのである。もう幾日もラインハルトは、この機械の前に立って、鉛筆片手に管をのぞいては、数字に数字を書き加えていた。

太陽が一、二尺のぼったとき、彼はまた窓を閉じ、ものみなの生きて働く外の美しい世界をしめだし、雨戸にあけた小さな穴から、ただ一筋の光線を暗い室内に入れた。この光線を注意深く拷問台にかけると、ラインハルトはすぐさまその日の仕事を始めようとして、紙と鉛筆を手にとり、管をのぞいた。昨日やめたところからつづけるつもりである。

するとかすかながら、チクリと刺すような痛さを眼に感じた。で、指先で眼をこすり、もう一度その眼で管をのぞいた。だが、やっぱり痛い。あまり仕事をつづけたので、もう眼がやられはじめたのだ。ことにたえず交代に明るい結晶を見たり、暗闇で数字を書いたりしたのがいけなかったのだ。

今さらこういうことに気がついて、彼は頭をふりふり顔を離した。眼がだめになると、五感にたよる研究はいっさいおしまいだ。そうなれば、今まで眼で見たものを、沈思黙考するほかはなかろう。彼は何かハッとして、やわらかな安楽椅子に腰をおろした。ところであたりがばかに暗く、しんとして、寂しいので、ふと奇妙な考えが忍びよってきた。

青年時代の大部分を活溌に動いて暮らし、人間間のことも注意して見てくるうちに、人倫世界にも法則や因果関係があることを確信するようになり、ほんの一言を口に出しても、それは、たとえ草原の一茎のそよぎのようにささやかであれ、原因となり、結果となってゆくことを信じたが、その後は眼で見える物質界の研究が、彼の唯一一切となった。

もう幾年も、彼は人間生活のことはほとんど忘れて暮らした。そして自分もかつては笑ったり、怒ったり、愚かだったり、賢かったり、喜んだり、悲しんだりしたことも忘れてしまった。今笑うのは、自分の化学物質の間にいろいろの喜劇や意外な反応が演ぜられるときだけであり、腹を立てるのは、計算をまちがえたり、観測をしそこなったり、ガラスをこわしたりするときだけである。今自分の賢さを感じて愉快になるのは、研究をしているうちに、無限に豊富な現象をごく単純な法則——たとえば〈はじめに力ありき〉（『ファウスト』の中の句）といったような——に帰着させるように見えるあの壮大な景観を眺めるときだけである。

「人倫的問題は」と彼はいつも言うのである、「現代では何といっても、色あせ落ちぶれた蝶々のように、空中にひらひら漂っている。けれどもこれは糸でしっかりつ

ないである。だからいつも姿を隠そうとするが、けっしてわれわれの手から逃げ去ることはないだろう」

ところが今は、前に言ったように、何だか浮かぬ気持になっていた。そして眼のことを心配しているうちに、眼で見ることのできる一切のよいものを想像したのである。ふとその中に人間の姿もまじっていた。しかもそれはバラバラに解剖された人体の各部分でなく、全体の姿である。眺めて美しく好ましく、快い響の言葉を聞かせてくれる全体の人間である。するとすぐにも、たくさんのよい言葉を聞き、それに答えてみたくなった。人生の透きとおった海原に漕ぎだして、自由のたのしい冒険をしながら、愛らしいものの誘う方へあちこちと小舟の楫を向けてみたいという欲望が起こってきた。けれども、人の世の習いにはうとくなって、ちょっとした手がかりもつながりも思いつかないのだ。彼は孤独に慣れて、身動きもできなくていた。あたりはあいかわらずしんとして暗かった。何だかうっとうしく、たまらなくなり、とび起きて雨戸を広くあけて、光を入れ、それから屋根裏の部屋にかけ上がった。そこには棚の中に、たくさんの本を入れっぱなしにしてある。それらは、半ば忘れた人間的な事がらに関するものである。彼は一冊引っぱりだし、埃を吹きとばし、パンパンたたいて言った。「さあ来い、頼もしいレッシング君（十八世紀の評論家、劇作家。ドイツ近代文学の父といわれる）。ミーチャン、ハーチャンでもきみのことは口にする。きみの真価は夢にも知らないくせに。きみの真価こそは、永遠の若さ、何事でもこなす練達さ、嘘いつわりのない、火に鍛えられた黄金のような絶対の善意なのだ！」

それはラハマン版のレッシング全集の一巻で、フリードリヒ・フォン・ローガウ（十七世紀の寓詩作家。忘れられていたのを、レッシングが発見して出版した）の寓詩がはいっている。ラインハルトが開くと、次の一句が眼にはいった。

きみ知るや　白百合を紅い薔薇にかえる法を
接吻せよ色白のガラテアに――顔紅らめて笑うべし

すぐ本を投げて彼は叫んだ。「ありがとう。すぐれたレッシング君。きみはもっと古い故人の口を通じてこんなすばらしい助言を与えてくれた！　おおぼくは知っていた、きみにききさえすれば、すぐ気のきいた返事が聞かせてもらえるのだ」

そしてまた本を取り上げ、この箇所をもう一度声をたてて読みながら、ラインハルトは叫んだ。「なんとすてきな実験だろう！　なんと簡単で、なんと深く、明瞭、的確だろう。なんと見事な按排、つりあいだろう。まさにそのとおりにちがいない。顔紅らめて、笑うべし！　接吻せよ色白のガラテアに。顔紅らめて笑うべし！」

こうくり返して口ずさみながら、旅行服をさがしだし、老僕を呼びよせ、いそいで旅行鞄をつめる手伝いをし、どれでもよいから貸馬を数日間借りるようにと命じた。留守を老僕に頼んで、一時間後には町の門を出て行った。あの誘惑的な実験に成功するまでは、断じて帰るまいと決心していた。

例の結構な指令は処方箋のように細い紙片に書いて、紙入れに収めておいた。

第二章　その半分に成功した次第

ラインハルトが露にぬれた路をしばらく進んだときである。そこここに大鎌が光り、元気な草刈女たちは刈草を地にひろげていた。すると彼は長くて幅の広い、とても美しい橋にさしかかった。まだ早いので渡るひともなく静まりかえっていて、まるで人気のない広間のように日向に横たわっていた。橋のたもとには、瀟洒な木組の番小屋が立っている。朝顔の花におおわれた小屋のそばには、清らかな泉が音を立てている。橋守の娘がちょうど顔を洗ったところで、髪を梳いていた。娘が橋税をもらいに近づいたとき、馬上の男は、娘が蒼いほど色白で美しく、すらりとした姿、品のいい陽気な顔、人おじしない眼つきなのを見てとった。ほどいたままの茶色の髪は肩や背をおおい、顔や手と同じように、さわやかな泉の水にぬれていた。

「まったく、娘さん」とラインハルトは言った、「あなたはこれまで会ったうちでいちばんきれいな橋守さんだ！　ぼくと少しおしゃべりしてくれなくちゃ、橋税はあげられませんな」

娘は答えた。「ずいぶん早起きなさったのね。そして朝っぱらから、たいそうなご機嫌ね！　でももう二、三べん、私がきれいだって言って下さるんなら、お好きなだけ、お相手してあげますわ。そしてあなたには、そのつど、これまで会ったいちばん物わかりのよい方だと言ってあげますわ」

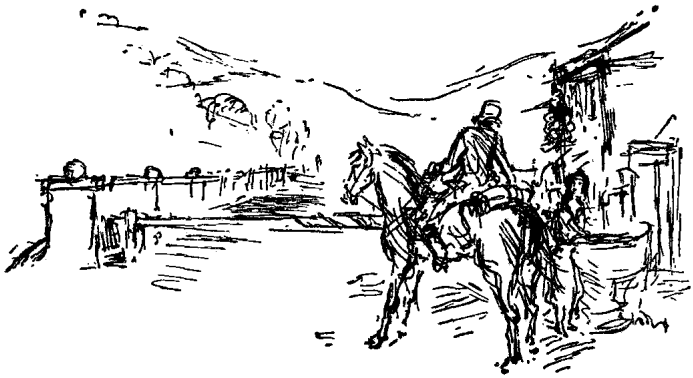
「じゃ、もう一度言いますよ。こんなきれいな新しい橋を造り、おまけにこんな気のきいた小屋を考えだした男は、小屋の前にこんな橋守さんの立っているのを見たら、さぞかし喜ぶでしょうね」

「ところがそうじゃありませんの。その男は私を憎んでいます！」

「なぜあなたを憎むんです？」

「それは、その男がときどき夜中に二頭立ての黒馬をつけて橋を渡るとき、私がしばらく待たせてから出て行って、関木をあけてやるからですわ。ことに雨が降って寒

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo



い晩には幌なしの軽馬車の中でぷりぷりしていますわ」
「またどうしてそんなに長いこと、関木をあけないんです？」
「その男が嫌いだからです！」
「おやおや、するとなぜ嫌いなんでしょう？」
「私が好きなくせに、私の方を見ないんですもの。ふたりはいっしょに育ったのに。橋がかかる前には、父がここで渡し舟をしていました。橋の建築家は川むこうの漁師の子でした。それで私たちは、お客が渡るとき、いつもいっしょに渡し舟に乗ったものです。ところが今は偉い建築家になって、私なんかにはもう知らん顔しています。でもほんとは私にたいして、恥ずかしいんです。だって私はきれいなのに、あの男は、せむしでめっかちの奥さんを馬車に坐らせているんですもの」
「こんな美しい建築を考えだした男が、どうしてそんな醜い奥さんをもらったんでしょう？」
「それは、議員さんの娘だからですわ。そのひとがこの橋を造らせてくれ、そのひとのおかげで偉く、有名になったからですわ。議員さんは、娘と結婚しなければ、橋は造らせてやらない、と言ったんです」
「そこで、そうした、というわけですね」
「ええ、よくも考えずに。それ以来、あの男が橋を通るごとに、私は笑わずにはいられませんわ。だって、頭の

中は、すらりとした柱や、高い教会の塔でいっぱいなのに、せむしの奥さんと並んでいる恰好は、とてもみじめですもの」
「でも、あなたが好きだということは、どこからわかります？」
「だっていつもここを通るんですもの。わざわざまわり道をしてまでも。そのくせ私の方を見ないんですの」
「あなたもちっとは同情しているんじゃありませんか。それとも、あなたの方でも好きなんじゃありません？」
「だったら、お話しなんかしませんわ！　好きでもない女をもらい、あとになってほかの女が見たくってしようがない、そのくせ見る勇気もない――そんな男は、頼りにならないけちな男ですわ。じゃありません？」
「まったくだ！　ことにその男が、美の何たるかを解しているからには、なおさらね。というのは、あなたとこの橋を眺めていればいるほど、よくも美しいものが二つそろったと、感嘆せずにはいられませんからね。ところでその男が醜い女をもらったのは、ただ橋を造りたいためだった！」
「しかし橋はお流れにして、私をもらうこともできたはずですわ。そうしたらやっぱり、あなたのおっしゃるように、美しいものを手に入れたことになるわ！」
「それはもちろん！　ところで彼は利益の方をえらび、あなたはあなたの美を取りとめた！　ここはあなたにはまさに適材適所です。大勢があなたを見て、目を楽しませることができます」
「私もそれが好きで、それが私の一番の楽しみです。百年もこうしてこの小屋の前に立っていて、いつまでも若く、きれいでいたいわ！　船頭たちは橋の下を通るとき、私に挨拶します。橋の上を行くひとは、私の方に首をねじってゆきます。背中を向けていても私にはわかります。それ以上の望みは私にはありませんわ。建築家先生だけが、たったひとり、私を見ないで、しかも何より見たがっているんです。けれども、もう橋税をお払いになって、おでかけなさいましな。私に下さったすてきなお言葉の代わりに、私のことはもう十分ご承知になったのですから！」
「ねえ、きれいな娘さん、ひとつぼくにキスして下さい、でないと橋税はあげませんよ」
「そんなら私は、いただく税金にまた税金を払い、自分の美しさに税金を出すことになりますわ！」
「それは当然ですよ。諺にもあるでしょう。〈重い地位には重荷あり〉って」
「さあさ、お静かにいらっしゃいな。だめですよ」
「誰よりきれいな娘さん、それっぽっちのことは、よろこんでして下さらなくちゃ！」

「橋税を渡して、行って下さい」
「ぼくだって、いつもこんなことをするわけじゃありませんよ。誰でも彼でもキスしはしません。もしおとなしく言うことを聞いて、してくれたら、行く先々できみの美しさを讃め、きみのことを話しますよ。ぼくは方々歩きまわるんだから」
「ご心配はいりません。〈良き品はおのずから現われる〉ですわ」
「では、ぼくは、たとえキスして下さらなくても、やっぱりあなたのことを話すでしょう。美しい娘さん！　だってあなたは、黙っているには、あんまりきれいだから。さあ橋税！」
ラインハルトは金を娘の手の中に置いた。すると娘は鐙に足をかけ、手を貸すと、ひらりと立ち上がって、彼の首に手を巻きつけて、笑いながらキスした。しかし顔は紅らめなかった。その白い顔には、紅くなるにはもっとも好都合な、似合わしい場所はあったのだが。橋を渡って、もう一度ふりかえった時、娘はまだ笑っていた。
ラインハルトはひとりごとを言った。「第一回は、実験は成功しなかった。必要な要素がそろわなかった。しかしこいつは問題だけでも、なかなかすてきな、好ましいものだわい。成功のあかつきには、何たるやりがいのあることだろうか」

第三章　他の半分に成功した次第

さていろいろなところを歩いているうちに、とうとう昼になったが、その後はよい機会にもぶつからなかった。やがておなかがすいて、昼飯時になったことに気づき、宿屋の方に馬を向けようとしたが、たしか古い知人のはずだったこの村の牧師のことをふと思い出し、その館に向かった。牧師館では思いもかけぬこととて、大喜びになり、それ大皿だ、小皿だ、壺だ、グラスだ、それ砂糖漬けだ、ケーキだという騒ぎになった。ふだんの昼食をもっと盛大にしようというのである。いちばんしまいに今を花ざかりの娘が出て来た。久しく会わなかったのでラインハルトはこの娘のいたことをすっかり忘れていたが、昔の小さなかわいらしい子を思い出し、今はりっぱな乙女に成長しているのに驚いた。その頬はほんのり紅にいろどられ、長めな鼻は時計の針のようにきまじめに、謹しんで地をさしている。つつましい眼もたえずそちらを追っている。娘は眼を伏せたままお客に挨拶したが、すぐまた台所に引っ込んでしまった。

さて父と母が客をもてなす話題は、もっぱら自分の家のさまざまな運命のことばかりだったが、その点で驚くべききちょうめんさを示した。彼らはこまごました経験や出来事をすべて、このうえなく綿密に整理し分類し、楽しいものと悲しいものを区別し、一つ一つに正しい光を当て、たがいにきちんと関係づける。そして主人はその全体に、けだかい浄めと照明を与えるが、その際彼は、このような驚嘆すべき人生行路を導くにあたって、牧師の天職としての練達な信仰が、いかに役立つかをほのめかすのであった。主婦は熱心に口添えして、嘆息や称讃の言葉を、結局は夫の自慢と、神様にたいするふさわしい感謝で結ぶのであった。神はこのささやかな、平和にいそしむ一家を、世界支配の特別に精巧に仕上げた工芸品として保存しているように見えた。どの部分もガラスのように透明で澄みきっていて、暗い感情のひとかけらも、ひそかに荒れくるうことはない。

これにふさわしく、たくさんのガラス鐘が一家のさまざまな記念品を埃からまもり、壁にかかった多くの額縁は、影絵や祝辞、金言詩、碑銘、花輪、髪で編んだ風景を入れて、すべて左右対称にならべられ、きれいなガラスでおおわれていた。ガラス戸棚には、サイン入りの茶碗、文字を刻んだ切り子のコップ、蠟細工の花、金メッキの留め金のついた教会簿などが輝いている。

牧師の娘が念入りに着飾ってまたはいって来たとき、この娘までが、香料のしみわたったガラス戸棚から出て

来たばかりのようだった。空色の絹の着物は、円味をおびた胸を窮屈なほどに包み、例の愛すべきまじめな鼻は、たえずそちらをさしていた。二つの金色の巻き毛は束ねずにたらし、真っ白な前掛けをかけていた。彼女はプディングを、まるで地球儀でももって来たように、大事そうに食卓の上に置いた。彼女のからだからは、今まで焼いていたお菓子の香料の快い匂いがプーンとした。

両親は娘をばかに改まった仰々しい様子で扱ったので、娘はこれというわけもなく何度も紅くなって、まもなく行ってしまった。彼女はラインハルトの馬のつないである中庭でこまめに動きまわり、気をきかせて馬に餌をやった。馬の鼻下に小さな庭卓子を置き、手製のパンの二かけ三かけ、半分に割ったフランスパンやビスケットを編物籠に入れてやり、サラダの葉もたっぷり添えた。またそれと並べて、緑色の如露に水をいっぱい入れてやり、おずおずと馬をなでたり、いろいろ殊勝に世話をやいた。それから自分の部屋に引っ込んで、この日の思いがけない出来事を急いで日記に書きこみ、またすばやく一通の手紙を書いた。

そのうちにラインハルトも、ひとまず馬の用意をしようとおりて来た。見ると、馬は如露に鼻を差し込み、それにまた編物籠が引っかかっている。馬はめんくらって振り放そうといらだつのだが、なかなかうまくゆかない。ラインハルトが大笑いしたので、娘はすぐ聞きつけて、窓からのぞいた。この珍事を発見すると、急いでおりて来て、思い切ってラインハルトに、ほとんどふるえながら頼んだ。この話は両親にも、誰にもしないで下さい、でないといつまでもみんなの話の種や笑いの種になりますからと。彼はあいそよく、できるだけ慰めてやったが、娘は籠と如露をかくしに、小鹿のように走って行った。けれどもまもなくライラックの茂みのうしろに現われたが、何か重大な頼みが心にかかっている様子だった。ラインハルトが茂みのかげにすり抜けてゆくと、娘はポケットから、ていねいに封印して、はでな書体で上書きを書いた手紙を出して、ささやきながら手渡し、挨拶とあるたいせつな用事が書いてあるこの手紙を、彼の道筋から遠くないところに住んでいる友達にまちがいなく渡して下さいと頼んだ。

同じようにささやきながら、仔細ありげな調子で、ラインハルトは、ある大事な願をかけたので、文句抜きで接吻させてもらわなくてはならない、と告げた。娘はすぐ逃げだそうとしたが、彼はしっかりつかまえて、「もしいやだと言うなら、如露の一件をみんなに話しますよ、そうするといつまでも噂の種になりますよ」とささやいた。震えながら彼女は立ちどまり、彼が抱くと、爪立ちさえして、眼をつぶって接吻した。顔中真っ紅になった

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo